

わく えがわく おく

2024年8月26日
第20号

＜発行＞
社会福祉法人
名古屋キリスト教社会館
発行責任者 小原貴史

東部地域療育センターぽけっと
〒464-0032
名古屋市千種区猫洞通1-15
TEL 052-782-3388

発達センターちよだ
〒463-0053
名古屋市守山区小幡千代田24-17
TEL 052-792-7277

これから子どもたちのえがおを大切に！



「発達センターちよだ」（守山区）は、二〇〇三年に名古屋市の委託を受けて「名古屋市立千代田学園」を引き継ぎました。

「東部地域療育センターぽけっと」（千種区）は、二〇一四年に同じく名古屋市の委託で開設しました。早いものでそれぞれに二十年、十年の時を刻んできました。

二つの施設を運営している「社会福祉法人名古屋キリスト教社会館」は、南区で「南部地域療育センターそよ風」、熱田区で「発達センターあつた」と計四か所の児童発達支援センターを運営しています。名古屋市に一〇か所の児童発達支援センターがあり、そのうち四か所を運営していることになりました。

名古屋市南部、南区・緑区を皮切りに障害乳幼児が通う場所としてだけでなく、市内の発達相談や療育の仕組みをつくることを目指してきました。一九八九年には「地域療育センター構想」を名古屋市とともに策定し、保健センター、保育園・幼稚園、学校、医療機関などと少しずつ繋がりを深めていきました。

そして、この二十年は、未知の地域だった名古屋市東部、守山区を中心に、千種区、名東区の関係機関の皆さんとのつながりを新たに作ることを目指してきました。

新参者の私たちを受け入れ、支えてくださった地域の皆さんがいたからこそ、「ぽけっと」の開設にこぎつけました。その後の十年も歩んできました。

筆者自身も真っ只中にいましたので、ただただ感謝に堪えない気持ちでいっぱいです。

ところで今、子どもの発達支援または療育について、



様々な動きがあります。国連は勧告の中で「インクルーシブ」＝誰もが同じ場を共有することが重要であり、それが保障されないのは「差別」であると指摘しています。



しかし、それぞれの子にも必要な「合理的配慮」がされないまま、何かなんでも同じ場所にいることを求めるのは逆に差別であり、虐待と言えるかもしれません。

保育園・幼稚園、学校の職員配置基準（一人の保育士や教員が対応する子どもの数）。必要な専門職種の配置。クールダウンのスペースなどひとりひとりに配慮した環境整備。

誰にもわかりやすい情報提示や自分で決められる生活の保障など、必ずしも発達支援を必要としない子どもにとっても必要な条件作りではないでしょうか。

制度全体については国や自治体の動きを待つしかない面もあります。昨年度は、子どもに関わる施策を一元的に担う「こども家庭庁」が創設され、そこへの期待は大きいのですが、一年たったもののまだその成果は見えません。この名古屋市東部地域で何ができるか。これから力を合わせて考えていきたいと思います。

そのためにも、次の十年に向けてまず取り組むのは、まもなく還暦を迎える「発達センターちよだ」の建替えと合わせて、新たな「守山区の地域療育センター」を生み出すことです。名古屋市の計画を後押しするために地域の方々の声を寄せていただくことが重要です。引き続きよろしく願いいたします。

加藤 淳
（東部地域療育センターぽけっと 前副所長）

わくわくフェスタ開催報告

今年も五月二十五日（土）に東部地域療育センターぽけっとにてわくわくフェスタ2024を開催しました。わくわくフェスタは「地域の子どもたちに楽しいあそびの文化をつたえよう！」と二〇一四年ぽけっと開所当時より、ぽけっと、発達センターちよだと合同でとりくみを作っていました。

今回はぽけっと駐車場内には中津川市加子母からお借りした木の迷路を設置、毎月一回ぽけっとで開催しているぽけっとマルシェも同時開催し、健康や安心に配慮した無添加、無農薬の食べ物を提供していただきました。法人本部の南区からは、ちどり児童会の子どもたちも参加し、わたがしやラーメンの販売、子どもたちが準備、販売を行い、お客さんとのやり取りを楽しんでいました。

企画として積み木のとよちゃんワークショップとして2万個の積み木での作品作りや体験を楽しみ、子ども環境デザイン研究所からは矢生秀仁さんに来ていただき、楽しいおもちゃ作りを行いました。毎年来ていただいているこんせいさんの有松鳴海絞り体験はオリジナルの作品を作るとい嬉し体験ができるコーナーになりました。他にも木工でのミニベンチづくりやバイオリン体験、折り紙体験など様々な企画を楽しむことができました。

あそびコーナーではどじょうすくい、泥んこコーナー、伝承遊び、紙トンボづくりなど多くの方が普段できないようなあそびを楽しみました。



（裏面に続きます）

ちよだ二〇年 ぽけっと二〇年 その先へ

特集 利用者、お世話になった皆さんからのメッセージ

息子と歩んだ三年 ちよだ ぼけつとと共

私の息子は重度知的障害を伴う自閉症、二十三歳の青年です。現在は生まれ育ったこの町で重度訪問介護サービスを使い、一人暮らしをしています。

障害があっても地域での生活の中で自分で選択し、時には失敗しながらでも、本人の暮らしを実現してほしいと願い、この暮らしを作ってきました。

始めた当初は、新しい環境や人に対して戸惑いや不安、怒り…。様々な息子の様子に心配は尽きませんでした。二年八月経った今、楽しみも見つかり、息子の頑張りと周りの方々のサポートのおかげで、落ち着いた日常へと変わってきています。息子の様に重い障害のある人は、家族と暮らす以外の選択肢が入所施設グループホーム、所謂、集団生活でしたが、今は制度として介護者付きの自立生活という選択肢もできました。

今後はどこで誰と暮らしたいか、どんな生活スタイルが本人に合うのか選ぶことができる、試すことができる、そこにはしっかりとサポートの枠組みがある、それが当たり前で誰でもあるようになって欲しいと願っています。

「なんとかならずは、の一心で」

息子が二歳になる頃、発達センターちよだの療育グループへの参加を勧められ、親子で参加しました。この時がちよだとの初めての出会いです。おとなしく、まわりのことに無関心、無反応、言葉もまったく出ない息子の様子に「なんとかならずは」と、不安と焦りの中、先生に相談したり、一緒に参加していた母親同士、お互いの子どもと話をしていくうちに、だんだんと気持ちが楽になっていったのを思い出します。息子にも笑顔が増え、周りに関心を示すようにもなり、表情豊かな子に成長していききました。

我が子の障害と向き合い、受容し、時に否定し、その繰り返し心の葛藤

をほぐしてくれる場所がちよだでした。現在は、ぼけつとと月に一度、仲間と一緒に太鼓グループを作り活動しています。

私たち親子にとって原点でもある場所、ちよだとぼけつと。これからも、誰にとってもいつでも帰って来れる温かい場所であり続けてください。

岩崎香子様

(発達センターちよだ 元保護者)

これからの発展を期待して

このたび、東部地域療育センターぼけつと十周年、発達センターちよだ二十周年を迎えられましたことを心よりお慶び申し上げます。

東部地域療育センターは千種区内の保育・教育施設、子どもやその保護者にとつての支えであり、地域になくはない存在だと感じております。

エリア支援保育所は、保育の質の向上と地域の子育て家庭への支援に取り組む公立保育所です。

令和五年度より、ぼけつとさんの施設支援事業が開始され、私共エリア支援保育所とも連携していただき大変心強く思っております。

千種区のエリア支援保育所では、今年度、ぼけつとさんにご協力いただき、「療育と保育をつなぐ」というテーマで、小規模保育事業所を対象とした保育研修交流会を行いました。参加者からは「自園の職員に研修交流会での学びを全て共有したい」「視点の変わる体験ができた」とこれからの保育に活かそうとする声がたくさん聞かれました。

子ども理解や保護者の心情を考慮した対応についてご助言いただいたことで、学びの多い交流会となり、子育て家庭を支える施設の保育の質の向上につながりました。

また千種区では、ぼけつとさんが中心となり、区内の発達支援を担う関係機関の交流や支援システムの構築を目的に療育連絡会が開催されています。

その際は千種区役所、千種保健センター、

そしてエリア支援保育所も協力させていただき、地域の現状を出し合いながら関係機関の交流と支援に向けて一緒に考える機会となっております。

今後、地域の子どもたち、保護者のためにより連携を深めていただけることをお願い申し上げます。

最後になりましたが、貴施設のますますのご発展を祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

小原 由紀子様

(内山保育園エリア支援保育所 園長補佐)

ちよだにかかわって二〇年

ちよだが社会館に移管してから二十年。当時、近所の子育て支援教室にボランティアで行く程度でしばらく現場からはなれて過ごしていましたが、その日子連れで行った小幡緑地公園でぼかばか（療育グループ）と出会ったのは縁だったのでしょうか。ちよだお手伝いしてみたい？週イチでいいからと誘われて、その後まさかの二十年近くのお付き合いになっていきます。ちよだで三人目も生まれました。（産休という意味です）

その頃のちよだは、外テラスの戸はガタピンでしっかり締まらず、すきま風（風が運んでくる枯葉や砂も）が入ってくるわ、現在の中廊下がコンクリートのたたきだったため冬は冷たくかく、トイレも使い古されたタイル張りですリッパはいて入るスタイル、保育室の壁紙もなんとというか：今でいう昭和レトロ感満載（よい表現）の建物でした。

その後歴代の園長、職員の先生達が、その時々に通ってくる子ども達や保護者さんが生活しやすい施設にと環境を整えて、現在の姿になってきました。

わたし自身はパートの作業療法士で、ちよだの何に関われるのか、自問の二十年でした（現在進行形です）。でも振り返ると、保護者さんや先生達と、時にはただただ可愛いねーと言い合ったり、その子がもっと楽しくなる作戦を考えたり、苦手そうだけどチャレンジした

くなるように仕掛けてみたり、実際に手を引いたり背中を押してみたり手を広げて待つてみたり、やっとなね！とぎゅつとしたり、やっばり可愛いね！と言いたつたり、そんな普通のことだったなと思います。専門的な療育を生活のなかで普通に、と考えてきた二十年だった気がします。

ちよだにはわたしのほかにも経験豊かなパート職員が何人もいて、わたしと同じように（わたしよりもっと）子ども達や保護者さん先生達を力強く支えていることもちよだの大きいポイントだと思っています。

四年前からは卒園や転園していった子達のフォローで、保育園・幼稚園・小学校に、通園から「ちよだができること」を運ぶ支援（保育所等訪問支援）にも関わっています。

通園、療育グループ、相談支援、デイチよだがひとつの大きい力で子ども達や保護者さんをしっかりと支えるこ

とができるようになったことを嬉しく思いながら、あの昭和レトロな建物を思い出しました。

これからも普通の生活と地域とのつながりを大事にして、これからちよだにくる親子、いま通っている親子、卒業していった親子、みんなにとって、いつでも支える安心できる場所であればいいなと思っています。

佐光雅子様

(作業療法士 発達センターちよだ)

(わくわくフェスタ 一面の続き)

では、児童書専門店「おおきな木」の代表の杉山三四郎さんにお越しいただき絵本ライブを開催しました。歌を交えた絵本の読み聞かせは会場一帯が楽しい雰囲気になって大盛況でした。その他にもじゅんぺくさんのダンスや名古屋大学サークルゆどうふさんによるシャボン玉体験、高さん・山口さんによるバイオリン体験、絵本読み聞かせと各コーナーで子どもたちと一緒に大人も笑顔になり楽しむ様子がたくさん見られました。



一昨年はコロナ感染予防の観点から近くの平和公園内のメタセコイヤ広場で開催しましたが、再びぼけつととを会場にしてわくわくフェスタを行うことができました。広い会場で開催できる良さも感じつつ、一方で施設の働きを地域の方に知ってもらえる良い機会になったのではないのでしょうか。

今後とも地域の子どもたち、利用者の皆さんにもっと楽しんでいただけるわくわくフェスタを通して、楽しいあそび、豊かな経験を子どもたちに伝えていきたいと思っています。

竹内啓祐 (ぼけつと地域主任)

おすすめ絵本

「くまくまパン」

作：西村敏雄 (あかね書房)

くまくまパン



「くまのパンやでパピプペポ、パン、ピン、プン、パン、パン！」リズムで始まり、暖かい色味とたくさんの動物が出てくるお話です。あさの子供たちは保育者が読むのを楽しみに待っています。たくさんのパンが出てくるページでは、どれが好き？とやりとりするのを楽しみます。パンが好きな子も、さまざまな動物たちの豊かな表情も見どころです。パンが好きな子も、パン屋さんへ行ってみるきっかけにもなるそんな絵本です。吉岡 陽 (ちよだ児童指導員)